

「東北グローバル考古学—宮城の先史を再発見—」⑤

美術と思想の起源

阿子島 香

はじめに

館長講座5回目は、後期旧石器時代の人々が残した洞窟壁画美術について取り上げます。ヨーロッパのクロマニオン人たちが持っていた世界観などについても、移動生活や生業経済を具体的に示す遺跡の事例を見ながら考えてみます。フランスのラスコー、スペインのアルタミラに代表される壁画の数々は、西洋美術の起源としての扱いを受けることもあります。それらはいったい、なぜ描かれたのでしょうか。その謎めいた「作品」の本質をめぐっては、当時の人々の思想を読み取る試みなど、これまでに多くの議論があります。美術作品として考える場合も多いテーマですが、今回講座では、考古資料の一つとして捉え、あわせてモノからコトを読み取っていく方法論についても説明したいと思います。

クロマニオン人の生活遺跡

クロマニオン人の生活様式は、「後期旧石器の革命」（前回講座）を経て、先立って生息していたネアンデルタール人のそれとは大きな違いがありました。遺跡の内容から生活様式を復元していく研究を紹介しましょう。後期旧石器時代後半の代表的な石器文化に、マドレーヌ文化があります。その中からフランス南西部、ピレネー山地の北麓に所在するドゥフォール岩陰遺跡の調査について解説します。フリント製の石刃と小石刃から多くの型式の石器を製作し、トナカイやアカシカを中心に狩猟生活を送り、季節的な居住地にも回帰していた人々です。ドゥフォール岩陰は、ニューメキシコ大学のローレンス・ストラウス教授により1981～1984年に発掘調査が実施され、私は1982年、1983年に参加し、同大学に提出した博士学位論文のために資料分析を行なう機会を得たものです。改めてストラウス先生に感謝いたします。

遺跡はピレネー山地と沿岸のアキテーヌ平野を結ぶ回廊状の地形に沿った石灰岩崖地にあって、南に遠くピレネーの山々が望めます。マドレーヌ文化後期の文化層では、礫を累々と積み上げた「礫敷遺構」が、8枚以上重複して検出されました。秋から春にかけて、トナカイの集中的な狩猟と加工処理活動が推定されました。大量の石器と動物の骨の分析と空間分布から、人間活動の内容復元が進められました。岩陰自体は20世紀初頭にブルーユが発掘しましたが、下方のテラス斜面に良好な文化層の堆積が残っていました。テラスに人間行動の場があって、エンドスクレイパーや彫刻刀など石器タイプの分布に、活動差

が反映されています。礫敷遺構の上で、火を使用したトナカイの大規模な加工処理活動が行なわれた可能性があります。

崖下には4ヶ所の岩陰遺跡があり、アランブール博士が継続発掘したドゥルティ岩陰からは、石灰岩製のウマの頭部小像と全身像、豊富な骨角器、サケ科の魚骨が出土しています。石器の技術と組成は、ドゥフォールと共通しています。バーンは、夏季にピレネー山地、冬季にアキテーヌ平野という、高地と低地の季節的移動説を提示しました。仮説では、トナカイの大群が移動する地形と遺跡の関係を考察しました。

フランコ・カンタブリア美術

クロマニオン人が残した洞窟壁画は、フランス南部とスペイン北部に集中していて「フランコ・カンタブリア美術」と総称されています。壁画洞窟は両地域で220カ所以上が確認されていて、後期旧石器時代を通して製作されました。最古級の壁画は、南フランスのローヌ川流域、アルデッシュ渓谷のショーヴェ洞窟で、1994年に新たに発見されました。ここでは、 $32140 \pm 720BP$ などの放射性炭素年代が測定されて、クロマニオン人たちがヨーロッパに到達した頃から、すでに芸術的な壁画制作が行なわれていたということが判明しました。

洞窟壁画が最初に発見されたのは古く、1879年のことです。カンタブリア地方のアルタミラでの「牡牛の天井」を、地元のザウトゥオラが報告したのですが、その後20年以上も学会では認められなかったという学史があります。有名なラスコー洞窟は、1940年の発見でした。東北歴史博物館の特別展「世界遺産ラスコー展ークロマニオン人が残した洞窟壁画」(2017年3月～5月)をご覧になった方は、ご記憶も新たなことと思います。壁画保護のために全面閉鎖されたラスコーの精密な複製が、国立科学博物館に続いて、当館にやってきました。当講座でも一部内容を振り返りましょう。傑作の壁画群「黒い牝牛」「背中合わせのバイソン」「泳ぐシカ」などの精密な複製を見ることができました。洞窟深部の暗黒のなかで、石を窪ませたランプの灯に照らされて描かれました。彩色画には鉱物性の顔料が使用されました。線刻画は石器で彫られました。写実的で躍動するような動物像に比較して、人物はデフォルメされ、「謎のトリ人間」が描かれました。

ルロア＝グーランと壁画洞窟研究

多くの壁画洞窟は、なぜ制作されたのか、狩猟呪術などの諸説があり、現在も議論が続いています。ルロア＝グーランによる研究は、その後の基礎になりました。全部で二千もの壁画モチーフを集成し、主題を計量的に分析して、壁画にはかなり厳密な構成、配置の規則性があることを実証しました。A群(ウマ)、B群(ウシ科のヤギウとオーロックス)、C群(シカ類、ヤギ、トナカイ、マンモス)、D群(クマ、ライオン、サイ)などのグループの、洞窟内での配置場所と、それらの組み合わせに規則的秩序を見いだしました。線形、太形など各種の抽象的記号も、動物モチーフとセットになる要素でした。洞窟内の場所と

の関連も分析されました。新人たちが有していた思想的な内容が、考古学の事実の中に表れていること、二元的な原理が象徴的な体系として表現されたことを論じたのです。詳しくは、阿子島（2019）をご参照いただければ幸いです。

奇妙な人物表現（呪術師の姿、半人半獣、ネガの手形）と、現代でも美術的価値を見出せそうな写実的な動物像との落差、洞窟の奥深くに配置されている動物群像、2万年間に及ぶ継続的な制作、特定の洞窟に限られた集中的な制作、フランコ・カンタブリア地域内にほぼ限定される分布、比率的には描かれた動物種と食料資源の内容が一致しないという事実、壁画美術と所持品装飾（小像、骨角器、投槍器）とのモチーフの区別など、クロマニヨン人たちが残した芸術は、今も謎が多く残っている文化現象です。なお、洞窟壁画としては稀ですが、人間の具象的表現として、フランス南部、ローセルの「角を持つヴィーナス像」など、壁面の浮き彫り（レリーフ像）が知られています。

しかし、それらもまた後期旧石器時代に初めて出現したホモ・サピエンスによる「現代人的行動」の一部でした。近年の国際学会でも多くの議論がなされている新人的行動には、次のようなものがあります。季節の変化に対する計画性の増大、将来を予見する能力、複雑な言語による社会的な紐帯の強化、遠方からもたらされる貝殻などの物品、道具の複合化による技術の組織化、移動と回帰のサイクルの確立、長距離を動いていた良質の岩石、構造的な住居の構築などです。今回はドゥフォール岩陰遺跡の調査をスライドで詳しく紹介しましたが、いろいろな生業活動や居住地移動の複雑な組み合わせの姿は、実際の遺跡や遺物に見ることができます。

おわりに

ネアンデルタール人の時代には存在しなかった洞窟壁画の豊富な制作、これらの芸術を残したクロマニヨン人の行動は、世界各地での新たな人類集団の適応放散の成功と同じような、人類の進化上の飛躍であったと、改めて評価することができます。そして、そのような新人たちが日本列島に現れて以後に、やはり東北地方でも人類適応における新しい時代を迎えたということ、あらためて指摘したいと思います。

美術と思想の起源というと、遺跡に残る日常生活とは、少し違う次元のお話のような気がするかもしれませんが、実は人類が厳しい環境の下で生きてきた証（あかし）として、同一の適応的文化進化がもたらした、ホモ・サピエンス登場の産物と言うことができるのです。

今回講座では、多くのスライドを用いて、フランスでの発掘と洞窟壁画の数々の、実際のような様子を見ていただきました。ドゥフォール岩陰遺跡の調査、レゼジー周辺の洞窟遺跡（フォン・ド・ゴーム、ルーフィニャック、レ・コンバレユ、ラスコー）、アルタミラ、ショーヴェなどです。なお、コロナ禍の第5波による重点措置・緊急事態宣言の影響で、8月28日予定の講座が延期されたことを、付記いたします。ご来場いただき、有難うございました。

参考文献

阿子島香（1996）「マドレーヌ文化期における適応戦略と遺跡構造分析」『古代』第 101 号所収。

阿子島香（2019）「ラスコーを生み出した日常生活」東北大学文学研究科人文社会科学講演シリーズ 11『未来への遺産』所収。東北大学出版会。

東北歴史博物館特別展図録（2017）『世界遺産ラスコー展』海部陽介展示監修、国立科学博物館他編集。